

作物名：麦類

病害虫名：オオムギ縞萎縮病（病原：*Barley yellow mosaic virus*）

コムギ縞萎縮病（病原：*Wheat yellow mosaic virus*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 症状と発生生態は大麦と小麦で似ているが、別々のウイルスによって起こる病害であり、相互には感染しない。
- 早春に、新葉に淡黄緑色の退色斑が現れ、やがて黄白色のかすり状のモザイクとなる（写真1～3）。葉身、葉鞘の伸長が抑制され、萎縮症状となる。軽症株では気温の上昇とともに症状は消えて生育が回復するが、重症株では生育の回復が遅れ、生育不良で草丈が低く、穂の抽出が不完全になることもある。また、穂数、粒数が著しく減少し、不稔粒が多くなる。
- 畑での発病は、ほぼ同心円状に中心部ほど症状が激しい場合が多い。発生部分の拡大は、畦方向に沿って起こる。水田裏作地での発病は、ほ場全体に発病が認められる例が多い。



写真1 成熟期の病徴

2 伝染源・伝染方法

- 土壌伝染性のウイルス病である。ウイルスを保毒した土壌中のポリミキサ菌が麦の根に寄生することで感染する。ウイルスは麦の残根中に形成されたポリミキサ菌の休眠孢子とともに土壌中に残り、次作の伝染源となる。

3 発病しやすい条件

- 地温が大麦では13～16℃、小麦では7～15℃の時期に感染が起こる。
- 早播きで、播種後の降雨が多く、感染に好適な地温が長く続く場合に発病しやすい。
- 発病後の低温は、症状の回復を遅らせて病勢の進展を助長する。

4 防除方法

- 同一麦種の連作を避け、発生を予防する。
- 数年間麦種を転換することで、発病が軽減される。
- 激発地では、5年間くらい作付けを行わない。
- 深耕（25cm）すると、発病をある程度抑制できる。
- 播種量をやや多くし、晩播きすると発病を軽減できるという報告がある。
- 農機具に付着した病土の移動は被害の拡大の原因となることから、被害ほ場は作業を後回しにする。

5 出典

（1）参考文献

- みやぎの麦類・大豆栽培技術指導指針（宮城県）
- 農業総覧 原色病害虫診断防除編1（農文協）

（2）写真

- 宮城県病害虫防除所撮影



写真2 発病ほ場



写真3 茎立期の病徴

(令和5年9月改訂)